HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	南北戦争とチャールズ・ディケンズ
Author(s)	一瀬, 真平
Citation	研究論集, 21, 111（左）-122（左）
Issue Date	2022-01-31
DOI	https://doi.org/10.14943/rjgshhs.21.l111
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/84013
Type	departmental bulletin paper
File Information	09_rjgshhs_21_p111-122_l.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

10.14943/rjgshhs.21.l 111

『南北戦争とチャールズ・ディケンズ』

一　瀬　真　平

要　旨

アメリカの南北戦争は，当時，イギリスの人々の関心事となっていた。しかし，英国作家チャールズ・ディケンズは，彼が監修する雑誌『一年中』の中でその話題を扱うことを抑制し，自身もその戦争について語ることを控えていた。本論では，この戦争と関連するテーマが，南北戦争期に発表された彼の作品の中に密かに刻まれている可能性に着眼したい。南北戦争中にイギリスの雑誌や新聞などでしばしば議論された話題に，アメリカの奴隷制への批判や，イギリスでの綿花不足の問題（アメリカ南部から綿花の輸入が途絶えることに関する危機感）がある。1860–1861 年に書かれた『大いなる遺産』には，どうもこれらの話題が潜んでいるようなのだ。本稿は，南北戦争がディケンズの作品執筆に与えた影響について述べていきたい。

新聞や雑誌といった定期刊行物が大きな発展を遂げた 19 世紀中頃，アメリカ南北戦争の情報は世界中で広く共有された。故に，この戦争は，アメリカ国内のみならず，ヨーロッパ，特にイギリスでも議論を巻き起こした。奴隷制を既に廃止していた英国にとって，アメリカの奴隷制の存続は人道的な観点から看過できない問題であった。この点は英国の北部支持者を増やした一方，戦争初期における北部の奴隷解放の消極性はこの支持者を幻滅させた[1]。また，戦争前夜に北部の賛同によって定められたモリル・タリッフ（保護主義的関税）などの経済政策は英国の自由貿易主義と相いれない。南部連合国への支持こそが英国の利益につながると考えた者もいた[2]。イギリスは国としては中立を保ったが，国内では様々な立場の思惑が渦巻き，南部擁護と北部擁護，双方の視点の記事が新聞や雑誌に満ちていた[3]。この時期，ジャーナリストでもあったチャールズ・ディケンズ（Charles Dickens）は，雑誌『一年中』（*All the Year Round*）を監修（監修時期：1859 年― 1870 年）していた。戦争はその編集方針に影響を与えただろう。まして彼は，1842 年のアメリカ周遊に基づく旅行記『アメリカ紀行』（*American Notes for General Circulation*）を書き上げていることからもわかるように，この国に深い関心を抱いてい

た。そして，戦争以前から南北の対立の根底にある奴隷制に辛辣な意見を述べていたのだ。

しかし，奇妙なことに，『一年中』には南北戦争をテーマとする記事は少なかった。1859 年より刊行が開始されたこの雑誌は，ディケンズ作品の発表の場ともなっており，『二都物語』（*A Tale of Two Cities*）や『大いなる遺産』（*Great Expectations*）といった代表作が掲載されている。一方で，小説とともに政治や経済，歴史，科学，教育まで多様なジャンルの記事を載せていた。特に，『一年中』は，海外に関する記事を扱う割合が多かった（Drew 10）。例えば，イタリア統一の英雄ジュゼッペ・ガリバルディについてのものなど，イタリア王国成立に関する記事が多く見られる。この新しい国家の樹立は，ディケンズが雑誌を監修した時期の英国の関心事であった。しかし『一年中』は，その頃最もイギリスの人々の目を引いた国際的な話題である南北戦争を扱うことを控えていた。『一年中』に関する詳細な研究を行った Oppenlander は，ディケンズの手紙を参照した上で，以下のように述べている：“After the American civil war broke out he［Dickens］dictated that no reference, however slight, was to be made to America in any article whatsoever, unless by himself, believing that to do otherwise than leave the subject alone was to do more harm than good”（38–39）. Oppenlander によると，ディケンズは，海外（英国）からの社会問題についての論評を嫌う外国人読者を刺激しないようにしたという（38）。実際，『一年中』はアメリカの読者も多かったので，特に懸念となっただろう。そしてディケンズ自身は，このような理由もあってか，戦争関連の記事をほとんど書かなかったようなのだ[4]。

しかしながら，南北戦争との関りからディケンズを考察することの意義は，まさにこの沈黙にある。John O. Waller は，ディケンズがこの雑誌の掲載記事を細かく点検していたこと，また，南北戦争の記事が少数ながらも掲載されていたことに着眼し，それらの記事の分析から南北戦争に関する『一年中』とディケンズの立ち位置を考察した（535–48）。彼は，『一年中』およびディケンズは，戦争初期は北部支持であったが，後に南部支持へ移ったことを巧みに推察し，この作家がやはり南北戦争に関心があったことを示している。本論の関心は，南北戦争についてのディケンズの抑制された言説を『一年中』に読み取ることである。本論がこの抑圧された関心が表現される対象として注目するのは，記事ではなく，雑誌に掲載された小説である。彼が雑誌の記事で書かなかったテーマが，形を変え，同時期に書いていた小説に現れているのではないだろうか。この現象を，南北戦争勃発時期にあたる 1860 年 12 月から 1861 年 8 月に『一年中』に掲載された『大いなる遺産』の中に求めていく。本稿がその潜伏した主題として着目するのは，奴隷制と綿花飢饉（戦争勃発によりアメリカ南部から英国への綿花の輸入が途絶えたことが一因で，産業革命期のマンチェスターを中心とした綿工業地域を恐慌が襲った）である。これらは，ディケンズがこの時期に書くことを控えていたが，彼にとって見て見ぬふりはできない問題でもあった。このような主題が，彼の作品に潜伏していることが考えられるのであり，本論はその潜み方に焦点をあてていきたい。

*

南北戦争に関するディケンズの沈黙は不可解に映る。なぜなら，彼は「奴隷廃止論者」（Johnson 402）と称されるような作家であったからだ[5]。ディケンズは，1842 年にアメリカを周遊した際，奴隷制の現状を目の当たりにし，『アメリカ紀行』に記している。

例えば，彼はヴァージニア州リッチモンドで，奴隷が働くタバコの工場とプランテーションを見学した。彼は，そこでの奴隷の置かれた状況に悲惨さを覚え，作品の中でこのように記している。

> I left the last of them behind me in the person of a wretched drudge, who, after running to and fro all day till midnight, and moping in his stealthy winks of sleep upon the stairs betweenwhiles, was washing the dark passages at four o'clock in the morning; and went upon my way with a grateful heart that I was not doomed to live where slavery was, and had never had my senses blunted to its wrongs and horrors in a slave-rocked cradle.（137）

この旅行記の結末近くでは，奴隷の話題に再び焦点が当てられている。南部で奴隷が如何に酷く扱われていたかを示すために，逃亡奴隷に関する新聞の広告を列挙した。

> ‘Ran away, Negress Caroline. Had on a collar with one prong turned down.’
>
> ‘Ran away, a black woman, Betsy. Had an iron bar on her right leg.’
>
> ‘Ran away, the negro Manuel. Much marked with irons.’
>
> ‘Ran away, the negress Fanny. Had on an iron band about her neck.’
>
> ‘Ran away, a negro boy about twelve years old. Had round his neck a chain dog-collar with “De Lampert” engraved on it.’
>
> ‘Ran away....（232-33）

上記のような引用が，Run away という言葉と共に数頁に渡って書き連ねられている。引用した奴隷の現状は，書いている本人も辛くなるものだったのかもしれない。ディケンズは“as my readers will be sufficiently sickened and repelled already, I will turn to another branch of the subject”（235）と述べ，途中で話題を切っていた。

この時期のディケンズの奴隷制への嫌悪は強く，アメリカを舞台とした小説『マーティン・チャズルウィット』（*Martin Chuzzlewit*）の中でもこの制度を風刺している。その後も彼は，Henry Morley と共著で “North American Slavery” という記事を書いた。1852 年 9 月 18 月に *Household Words* に掲載されたこの記事には以下のような言葉が書かれている。

> We believe that earnest and dispassionate inquiry among men experienced in all the details of the question, would lead eventually to a performance by America of the moral duty of emancipation in a way that might wipe out every reproach for the past treatment of the negroes, and reflect eternal honour on the stars and stripes.（５）

このような反奴隷制のスポークスマンが，南北戦争が始まるとこの制度について口を閉ざした。

ディケンズがこの制度への言及を控えた矛盾はこれまでにも考察されてきた。例えば，

Grace Moore は，19 世紀中頃の緊迫した国際情勢にディケンズの意識が向かったため，奴隷問題への関心が相対的に下がったことを指摘する（56）。当時ロシアに脅威を感じていたイギリスにとって，アメリカはロシアに対抗する強力な仲間でありえた。アメリカの制度を干渉し気分を害すよりも，アメリカとの友好を維持することが英国の利益になるとディケンズは考えていたのではないか，と Moore は指摘する。また，Sidney P. Moss は，ディケンズが，アメリカ滞在中にも奴隷制への言及を控えた点に注目し，その沈黙と国際著作権の関連に焦点をあてている（176–77）。当時，ディケンズの作品はアメリカでも人気を博していたが，海賊版が出回っており，経済的な面で人気の恩恵を受けなかった。ディケンズは，南部から国際著作権の支持を得るため，奴隷制への非難を控えたと考えられるのだ。南北戦争中の沈黙に関してもこの理由があったのかもしれない。

これらの理由も興味深くはあるが，本論の関心は，自らの沈黙に対するディケンズの反応である。奴隷制の現状を実際に目の当たりにし，この制度がない社会（当時の英国）に生きることに感謝の気持ち（“a grateful heart” [*American Notes* 137]）を抱くと書いた者が，その制度の是非が根底にある戦争がアメリカでいざ始まろうとすると，黙してしまった。このことが彼に重くのしかかり，この話題が彼の書き物の中に姿を変えて抑圧的に書かれたということは考えられないだろうか。実際，奴隷制の話題は（先に触れた）タバコや逃亡奴隷という観点とともに，『大いなる遺産』に潜伏しているように見える。

『大いなる遺産』は『一年中』に 1860 年 12 月 1 日から 1861 年 8 月 3 日まで連載された。まさにこの時期，アメリカでは南北の対立を巡る重大な出来事が頻発していた。1860 年 11 月，反奴隷主義を掲げる共和党のエイブラハム・リンカーンが大統領選に勝利した。リンカーンは南部の奴隷制を即座に廃止するつもりはなかったが，彼の当選は南部を不安にさせ，1860 年 12 月から 1861 年 4 月にかけて，11 の奴隷州が連邦から離脱した。これらの州は 1861 年 2 月にジェファーソン・デイビスを大統領とするアメリカ南部連合を結成した。一方，同年 3 月にリンカーンが大統領に就任した。1861 年 4 月にサムター要塞で北部連邦軍と南部連合軍の両陣営が衝突。以後，４年に渡る南北戦争が始まっていく。ディケンズが『アメリカ紀行』で繰り返し言及した「逃亡奴隷」という観点に焦点をあてると，当時は北部の州でも 1850 年の逃亡奴隷法が有効であった。この法律は，逃亡した奴隷が逮捕された州では，そこが自由州であっても，奴隷を主人に返すことを義務づけた。それをしなかった州の役人や，逃亡者の解放に協力したり，逮捕を妨害したりした人は処罰されるというものであった[6]。この法律が施行された 1850 年から南北戦争までの間，奴隷廃止派はこの施行に刺激されて奴隷解放に一層積極的になった。例えば逃亡者が外国に逃げ込めるように「地下鉄道（奴隷の逃亡を助ける秘密組織）」の活動が活発化した[7]。戦争開始後の 1861 年 5 月，北軍の将軍ベンジャミン・フランクリン・バトラー（Benjamin Franklin Butler）は，奴隷は「戦時禁制品」であり，北軍は逃亡した奴隷を南部に返還する必要はないと主張した[8]。同時期に起きたこれらの出来事に触発されて，ディ

ケンズが抑制した奴隷の話題を作品に書き込んだということは考えられないだろうか。

この点で注目するのは，作品の主要人物であるマグウィッチ（Magwitch）である。この登場人物は物語の最初に脱獄囚として登場し，主人公のピップ（Pip）に食料をめぐんでもらう援助を受ける。その後，マグウィッチは再び捕まってしまいオーストラリアに流されるのだが，彼はピップへの恩義から，流刑地でお金を稼ぎ，この青年に匿名で寄付をする。物語後半，マグウィッチは本国に帰還してはいけないという禁止を破り，英国へ逃げピップの前に姿を現す。マグウィッチはピップに彼自身の不遇な生い立ちを語る。さらに彼には，悪人のコンピーソン（Compeyson）に騙され行動を共にし，最終的に裏切られた過去があったことが明かされる。物語終盤，マグウィッチはピップらの助けのもと国外へ逃亡を試みるが，この逃亡計画は最終的に失敗してしまう。

ディケンズは，この逃亡者を，黒人奴隷を彷彿とさせる人物として描いている。マグウィッチはコンピーソンとの関係において，自分を「黒人奴隷」に喩えている。“that man［Compeyson］got me into such nets as made me his black slave. I was always in debt to him, always under his thumb, always a working, always a getting into danger”（262）. マグウィッチは，この「主人」に搾取されるだけでなく，国外へ逃亡計画中も執拗に追いかけられている。この意味で，彼は逃亡奴隷を思わせる。

実際，現代の批評家は，この人物と逃亡奴隷の関連を指摘してきた。Julia Sun-Joo Lee は，マグウィッチが語る自身の人生の物語はスレイブ・ナラティブに共鳴していると主張している（113-130）。Elaine Freedgood は，“［the slavery］is very nearly interchangeable with imprisonment and transportation”と指摘した上で，作品の序盤でマグウィッチが捕まった場面に関して “Pip and Joe empathize with Magwitch when he is recaptured as if he were a runaway slave”（97）と述べている[9]。

ここで注目すべきは，作品の舞台である 19 世紀前半の言説では，オーストラリアへの流刑囚が奴隷にしばしばなぞらえられていたことだ。例えば，Edward Gibbon Wakefield は，1833 年に出版された *England and America: A Comparison of the Social and Political State of both Nations* の中で，“［i］n New South Wales and Van Diemen's Land, prosperous colonies, capitalists are supplied with slave-labour in the shape of convicts” と主張している（123）[10]。このような当時の言説がある中で，ディケンズは，作品の中の流刑囚を逃亡奴隷に喩えた。

マグウィッチが奴隷と関連づけられている意義について，Lee は “the slave narrative provided a model through which to comment on the British class system and its treatment of convicts”（９）という提案をしており，この指摘は興味深い。だが，本論が関心を寄せたいのは，この作品の執筆期間中にアメリカでは南部と北部の分裂が起こっており，ディケンズがこの時期に奴隷について語ることを抑制していたことである。本論の主張は，抑制したものが噴出したかのように，ディケンズはマグウィッチを奴隷のように描いたのではないだろうか，ということである。助けることを禁じられた逃亡者を海外へ逃がすピップの姿は，「地下鉄道」の奴隷廃止論者のようでも

ある。主人公が黒人奴隷的な人物を自由にする物語を描いてしまうのは，ディケンズの奴隷制批判者としての側面の表れではないだろうか。

また，マグウィッチの吸っているタバコの名前が作中で強調されていることにも注目したい。タバコの銘柄はその名も ‘Negro Head’ であり，黒人奴隷を意識させるものである。Freedgood や中村隆も，この名前に注目した上で，当時の煙草の広告がアフリカ系アメリカ人のイメージと結びついていることを指摘し，この登場人物と奴隷との関連性に着眼していた（Freedgood 92–96；中村 164–165）。作品内では ‘Negro Head’ という言葉が四度にもわたり言及される。ディケンズはタバコ農園の奴隷労働の現状を見て，この制度に嫌悪を感じた経験を持つ。逃亡奴隷の影をまとった人物が ‘Negro Head’ を喫っている場面を執拗に描くのは，一種の抑圧の回帰ではないだろうか。つまり，ディケンズは『アメリカ紀行』で焦点をあてた逃亡奴隷やタバコの話題を，南北戦争の時期に雑誌では語らなかったが，自身の作品である『大いなる遺産』の中に刻んでいた可能性が考えられるのだ[11]。

*

ディケンズが南北戦争関連で語らなかった話題としてもう一つ注目したいのは，英国での綿花不足である。産業革命下のイギリスは綿工業が発達していた。綿織物産業が最も盛んなランカシャー地方は，原綿の供給をアメリカ南部に頼っていた。だが，アメリカの北部と南部の戦争により，英国への南部からの綿の輸出が途絶えた。備蓄された原料の綿花がなくなっていったことは，綿花飢饉と呼ばれる恐慌の一因となった[12]。この危機により，綿織物工場の閉鎖，大量の労働者の失業，彼らの貧困がランカシャー地方を襲った[13]。

ディケンズは，ランカシャー地方の綿花不足の問題に関心を持っていたことが考えられる。なぜなら，この作家は，労働者に視線を注ぐ作家であった。少年時代に靴墨工場で働いた自身のトラウマ的な経験もあり，労働問題は彼の想像力の源泉ともなっていた。ディケンズは，イギリス産業の中心であった綿工業にも関心をもち，ランカシャー地域のマンチェスターの工場を観察したことがあった[14]。後に，ランカシャー地方を思わせる架空の町コークタウン（Coketown）を舞台とした『ハード・タイムズ』（*Hard Times*）で，労働者の過酷な環境を描いてさえいる。

Grace Moore によると，南北戦争勃発から一年経った 1862 年，ディケンズは，綿花不足によって労働者が置かれた状況を懸念し，アメリカ南部の綿花の代替としてインドの綿花を有効活用できずにいることに苛立ちを示していた[15]。国内に直接的な影響を与えるこの綿花の問題は喫緊の話題であった。ゆえに，南北戦争の記事を控えるように指示したディケンズも，綿花の話題は『一年中』の中でも重視していたようだ。1862 年の同雑誌には，綿花に関する記事，特に，南部の綿花の代替供給地に触れる記事が散見される。例えば，1862 年 12 月 13 日号の “State and Prospects of Cotton” はこの話題を主題とし，綿花の供給地としてインドが期待できることを述べていた（330）。また，1862 年 1 月 4 日号の“A Cotton Eden”の最後は以下のように締めくく

られている：“If America should continue unavailable, we may solace ourselves by looking eastward, and we shall soon discover that India, Egypt, and the Lebanon, will give us all the cotton we require” (344). だがディケンズ自身は，この綿花問題に関しても雑誌の中で言及していないようだ。

しかし，ディケンズは，綿花不足に関わる問題の憂いを，『大いなる遺産』に密かに刻んでいたようなのである。確かに，この作品を連載していた戦争が始まってすぐの時点では，大量の綿花のストックが英国にあったため綿花不足は深刻化していない。しかし，アメリカ南部の綿花への過度の依存が後にイギリスに深刻な事態をもたらすことは，一部では早くから懸念されていた。例えば，1861 年 1 月 19 日号の *The Economist* の “The Disruption of the Union, As It Would affect England” は，戦争勃発前の 1861 年 1 月，南部の連邦離脱に伴う混乱を受け，その混乱の激化が綿花栽培に影響を与え，イギリスに害を与えることを懸念していた (58)。このような事態に備え，記事の中では，インドやブラジル，エジプトなどの綿花の代替地が注目されていた（58)。さらにさかのぼれば，例えば，英国では 1857 年に綿花供給協会（Cotton Supply Association）が結成されている。この協会の役割の一つは，アメリカ以外の綿花供給源を探すことであった[16]。ランカシャー地方の人々は，英国の綿工業が奴隷制という危うい制度で成り立つ南部の綿花に依存していることに危機感をもっていたのだ[17]。このような背景のもと，戦争がちょうど勃発し，その危機が現実味を帯びようとした 1861 年の春に書かれた『大いなる遺産』の終盤に，綿花の代替地を求めるディケンズの焦りが潜んでいるように思う[18]。

これは主人公ピップが就いた職業に反映されている。この作品は，ジェントルマンになることを目指したピップを中心に物語が展開される。彼は，最終的に，友人のハーバート（Herbert）が経営する貿易会社の事務員として働き，中東の仕事に携わる。具体的には彼はエジプトのカイロに向かう。Anny Sadrin によると，創作ノートの段階では，この仕事で成功を収め彼らが繁栄するところで物語が閉じる計画であった（19–23)。原稿の最終段階では，エステラとピップの再会が物語の結末に置かれている。だが，このノートは，ピップたちが取り組む事業が，ディケンズの頭の中で重要なウェイトを占めていたことを示しているだろう。

完成した作品では，この事業が成功したことが述べられているが，ハーバートたちの仕事の様子は詳細には描かれていない。彼らがエジプトへ渡った目的にはどのようなことが考えられるか。それは，彼らの会話から垣間見られるように思う。ハーバートはカイロへ出発する時，マグウィッチを見守るためにすぐにはエジプトへ出発できないピップに対して，こう言っていた：“My dear Handel［Pip］, I fear I shall soon have to leave you...We shall lose a fine opportunity if I put off going to Cairo, and I am very much afraid I must go, Handel, when you most need me” (334). ピップは，最初はハーバートの事業計画を軽蔑していたが，作品の最後にこの友人に商才があることを認め敬意を抱いている。そのハーバートは, 作品中盤ではアジアに目をつけていたが, 最終的には急いでエジプトへ向かった。

実際の歴史を振り返ればその理由がわかるように思う。Sadrin の作品設定時期の分析による

と（41–42），彼らがエジプトに向かうのは 1820 年代頃と考えられる。1820 年代のエジプトは，エジプト総督ムハンマド・アリーの近代政策のもと，経済発展に力を入れ出した頃だ[19, 20]。それまでもエジプトはインドの中継地としてイギリスに重視されていたが，経済的な意味でも重要性が高まり始めていた。だが，ムハンマド・アリーの時代にエジプトの経済的価値に早くから着眼し主導したのはフランスの投資家だったと考えられている[21]。この時期，イギリスは，エジプトとの取引で必ずしもリードしておらず，エジプトでの利益を得るために，フランスなどの他国に先立ってエジプトでの地位を固めることが重要であった。このような歴史的な状況を視野に入れて小説に視点を戻すと，ハーバートは，国内のライバルのみならず，海外の競争相手より早く商機を掴むため，エジプトの事業を進めるのを急いでいたと考えられるだろう。

本論にとって重要なのは，この時期のエジプトの主要輸出品として躍り出ていたのが綿花であることだ[22]。ムハンマド・アリーの政策の中で成功を収めたのが商品作物の栽培，特に，綿花栽培である。エジプトでは，1820 年頃より，世界市場に向けた新種の綿花の栽培が導入された。エジプトの綿花は英国でも評判が良く，1820 年代に多くの貿易商人が綿花取引による利益を求めてエジプトにやってきたようだ[23]。ナイル川のデルタ地帯を中心に農地が拡大し，灌漑設備を整える一大事業が 1830 年代以降行われている。そこで栽培された綿花はヨーロッパ，特に綿織物産業が盛んなイギリスへの主要な輸出品となっていった。そして，南北戦争中，南部からの綿花の供給が不足した国際情勢により，エジプトの綿花が注目され飛躍的に売れた[24]。この繁栄により，1861 年，世界で初めての綿花の先物取引所がエジプトの貿易港アレサンドリアで誕生し，エジプトは綿花を扱う国際的な主要取引所となっていく[25]。

ピップやハーバートたちがエジプトに向かうのは，19 世紀前半，エジプトの綿花が国際市場に定着し，イギリスから関心を集め出した頃だ。この点でも，ハーバーたちは，機宜にかなってエジプトに向かったといえる。ハーバートらは，当時のエジプトの輸出品の目玉であるコットンを貿易で扱ったと考えられるだろう。

ここで注目すべきは，ディケンズが 1861 年春にハーバートらの事業の場面を描いていることだ。作品結末近くの事業は，作品執筆時期のイギリスで懸念されつつあった綿花不足の問題を解決する役割を持っているとも言えるだろう[26]。勿論，ハーバート達はムハンマド・アリーの時代のビジネスチャンスをつかむためにその地へ向かうことを急いでいたことが考えられるのであり，この 19 世紀前半の時点では，南北戦争が引き起こす未来の綿花不足の憂いを知る由もないだろう。本論が着眼したいのは，彼らのエジプトへ向かう振る舞いと性急さには，執筆時の作者の綿花不足への焦りが反映されているのではないだろうか，ということである[27]。先に見たように，この作品の執筆より一年後，実際にディケンズは綿花の供給地の問題で苛立ちを感じていたし，それらの記事が『一年中』にも散見された。そのようなディケンズは，南北戦争初期にも，迫る綿花不足に焦りを感じていたことが考えられ，その思いが物語の結末近くのピップたちをエジプトへ向かわせたのではないだろうか[28]。

＊

ディケンズは南北戦争について記事に書くことを抑制したが，その言説は彼の小説の中で隠れたテーマに置き換わりそこに伏流していた。ピップのマグウィッチ救出は奴隷解放を暗示させた。そして，ハーバートとピップの事業は綿工業の原料を求めていたように思う。これら南北戦争と関わる主題は，作者にとって看過できない問題であり，ゆえに作品へと滲み出たのだろう。しかし，それは何かを読者に暗示するためというより，自身の心理的な葛藤のために起こったことであるように思う。

だがその一方で，この抑制された南北戦争のテーマを含んだテクストは，アメリカの読者の間ではより重要な意味を持ち得たのかもしれない。『大いなる遺産』がアメリカに渡ったとき，このテクストはより緊迫した時代背景のもとで読まれることとなる。南北戦争下のアメリカの読者は，その抑圧的に刻まれた主題に敏感になったかもしれない。アメリカではこの作品がより南北戦争と関わりのある作品として受け止められた可能性があっただろうことを，今後追及できればと思う。

（いちのせ　しんぺい・人文学専攻）

注

＊本研究は JSPS 特別研究員奨励費　JP21J11074 の助成を受けたものです。

1．例えば，D. Campbell 18–20 を参照。

2．Morrill Tariff に対する英国の反応に関しては，D. Campbell 41–47 や Palen 35–61 を参照。『一年中』の南北戦争の記事は少ないが，その中の一つの記事は，この関税が南北戦争の争点だと主張している（“Morrill” 328–31）。

3．南北戦争中の英国の世論に関しては，Blackett 89–212 を参照。また，アメリカの混乱を目撃して，民主主義の有効性が英国では頻繁に議論されていた。この点に関しては Kinser, *The American Civil War* を参照。

4．Waller もディケンズが殆ど南北戦争の記事を書かなかったことに着眼している。Waller は，1862 年 3 月 1 日号の “The Young Man from the Country” を，ディケンズが『一年中』に書いた南北戦争に触れる唯一の記事だと指摘している。Waller は，その内容は南北双方への嫌悪を示す中立的なものだと指摘する（536）。

5．Dickens の奴隷制への言及とその問題についての彼の考えについては，例えば，Adrian 315–29 を参照。

6．S. Campbell 23–25 を参照。

7．Finkenbine 1993–94 を参照。

8．S. Campbell 189 を参照。

9．国内でも，山本隆がマグウィッチと逃亡奴隷の関連を詳細に考察している（159–65）。

10．流刑囚と奴隷の関連の言説については，Stephen 111–13 を参照。

11．中村の議論は，南北戦争とは関りがないが，その論考の中で，ディケンズがアメリカで見た逃亡奴

隷のイメージがマグウィッチの中で蘇った可能性を指摘している（162）。

12. Henderson 35 や Speck 86–87 を参照。綿花飢饉の詳細については，森，『イギリス綿花飢饉』を参照。
13. Henderson 52–93 を参照。
14. Marcus 30–32 を参照。
15. 綿花不足へのディケンズの関心については，Moore 157–58 を参照。
16. Earle 524 を参照。
17. Cotton Supply Association 5 を参照。
18. 『大いなる遺産』は 3 つのステージから成り立つ。ディケンズは，1861 年 4 月には 3（最終）ステージに取り組んでおり，1861 年 6 月頃には作品を書き終えたようだ（Rosenberg 397–98）。
19. ムハンマド・アリーの時代の政策に関しては，Fahmy 139–79 を参照。
20. John S. McBratney は，コスモポリタニズムの観点から小説を評価する論考の中で，ハーバート達がエジプトに着いた時期，ムハンマド・アリーの政策の下でエジプトが経済的に重要であったことに触れている（536）。彼は，“Dickens's decision to send Pip to Egypt may seem arbitrary”（540）と述べているが，本論は，この時期のエジプトの経済政策（綿花栽培の発達）の詳細と執筆時期が南北戦争中であったことに注目し，そこには必然性があることを述べたい。
21. フランスのエジプト進出に関しては，Niall 230 を参照。
22. この時期のエジプトの綿花栽培の拡大の取り組み，および，輸出の拡大については，Fahmy 162, 170–71 や Owen 29–57 を参照。
23. Owen 37 を参照。
24. 例えば，Hunter 186–87 や Earle 520–54 を参照。
25. Çalışkan 157 を参照。
26. David Paroissien は，ハーバートらがエジプトに向かうのは，英国の経済的関心が南北戦争時期に綿花の供給地へ関心があったことに関連する可能性に簡潔に触れている（376）。
27. エジプトは，（別の重要な綿花の代替地である）インドへのルートを確保するためにも重要である。さらに，ピップは，作品中，インドに行くことを考えていたこともあった（253）。
28. Jonathan Grossman は，カイロがピップの目的地として選ばれた理由は，フー半島（Hoo Peninsula）にある「Egypt Bay」（マグウィッチが監獄船の中に消えていくのをピップが目撃した重要な場所）に関係していると指摘している（249）。

引用文献

Adrian, Arthur A. “Dickens on American Slavery: A Carlylean Slant.” *PMLA,* vol. 67, no. 4, 1952, pp. 315–29.

Blackett, R.J.M. *Divided Hearts: Britain and the American Civil War*. Louisiana State UP, 2001.

Çalışkan, Koray. *Market Threads: How Cotton Farmers and Traders Create a Global Commodity*. Princeton UP, 2010.

Campbell, Duncan Andrew. *English Public Opinion and the American Civil War*. Royal Historical Society, 2003.

Campbell, Stanley W. *The Slave Catchers: Enforcement of the Fugitive Slave Law, 1850-1860*. U of North Carolina P, 1970.

Charles, Dickens. *American Notes and Pictures from Italy*. Oxford UP, 1957.

——. *Great Expectations*. Edited by Edgar Rosenberg, Norton, 1999.

——. *Martin Chuzzlewit*. Edited by Margaret Cardwell, Clarendon, 1982.

Charles, Dickens, and Henry Morley. “North American Slavery.” *Household Words*, 18 Sept. 1852, pp. 1–6.

Cotton Supply Association. *The Fifth Annual Report of the Executive Committee, Adopted at the Annual Meeting of Subscribers, Held at the Town Hall, on Tuesday, Sept. 23rd , 1862*. J.J. Sale, 1862.

Drew, John. “*All the Year Round*.” *Oxford Reader's Companion to Dickens*, edited by Paul Schlicke, Oxford UP, 2011, pp. 9–12.

Earle, Edward Mead. “Egyptian Cotton and the American Civil War.” *Political Science Quarterly*, vol. 41, no. 4, 1926, pp. 520–54.

Fahmy, Khaled. “The Era of Muhammad 'Ali Pasha, 1805–1848.” *The Cambridge History of Egypt: Modern Egypt, from 1517 to the End of the Twentieth Century*, edited by M.W. Daly, Cambridge UP, 1998, pp. 139–79.

Finkenbine, Roy E. “Underground Railroad.” *Encyclopedia of the American Civil War: A Political, Social, and Military History*, edited by David Stephen Heidler, et al., ABC-CLIO, 2000, pp. 1993–94.

Freedgood, Elaine. *The Ideas in Things: Fugitive Meaning in the Victorian Novel.* U of Chicago P, 2010.

Grossman, Jonathan H. “Living the Global Transport Network in Great Expectations.” *Victorian Studies: An Interdisciplinary Journal of Social, Political, and Cultural Studies*, vol. 57, no. 2, 2015, pp. 225–50.

Henderson, William Otto. *The Lancashire Cotton Famine: 1861-1865*. Manchester UP, 1934.

Hunter, F. Robert. “Egypt under the Successors of Muhammad ‘Ali.” *The Cambridge History of Egypt: Modern Egypt, from 1517 to the End of the Twentieth Century*, edited by M.W. Daly, Cambridge UP, 1998, pp. 180–97.

Johnson, Edgar. *Charles Dickens: His Tragedy and Triumph*. vol. 1, Little, Brown, 1952.

Kinser, Brent E. *The American Civil War in the Shaping of British Democracy.* Routledge, 2016.

Lee, Julia Sun-Joo. *The American Slave Narrative and the Victorian Novel.* Oxford UP, 2010.

Marcus, Steven. *Engels, Manchester, and the Working Class*. Random House, 1974.

McBratney, John S. “Reluctant Cosmopolitanism in Dickens's *Great Expectations.*” *Victorian Literature and Culture,* vol. 38, no. 2, 2010, pp. 529–46.

McParland, Robert. *Charles Dickens's American Audience.* Lexington, 2010.

Moore, Grace. *Dickens and Empire: Discourses of Class, Race and Colonialism in the Works of Charles Dickens*. Ashgate, 2004.

Nicholas, Stephen. “The Convict Labour Market.” *Convict Workers*: *Reinterpreting Australia's Past*, edited by Stephen Nicholas, Cambridge UP, 1988, pp. 111–126.

Oppenlander, Ella Ann. *Dickens' All the Year Round: Descriptive Index and Contributor List*. Whitston Publishing, 1984.

Owen, E.R.J. *Cotton and the Egyptian Economy 1820-1914: A Study in Trade and Development*. Clarendon, 1969.

Palen, Marc-William. “The Civil War's Forgotten Transatlantic Tariff Debate and the Confederacy's Free Trade Diplomacy.” *Journal of the Civil War Era*, vol. 3, no. 1, 2013, pp. 35–61.

Paroissien, David. *The Companion to Great Expectations.* Greenwood, 2000.

Rosenberg, Edgar. “Launching *Great Expectations*.” *Great Expectations*, by Charles Dickens, Norton, 1999, pp. 389–426.

Sadrin, Anny. *Great Expectations*. Unwin Hyman, 1988.

Wakefield, Edward Gibbon. *England and America: A Comparison of the Social and Political State of Both Nations*. 1833. A. M. Kelley, 1967.

Waller, John O. 'Charles Dickens and the American Civil War.' *Studies in Philology,* vol. 57, no. 3, 1960, pp. 535–48.

"The Morrill Tariff." *All the Year Round*, 28 Dec. 1861, pp. 328–31.

"The Young Man from the Country." *All the Year Round*, 1 Mar. 1862, pp. 540–42.

"State and Prospects of Cotton." *All the Year Round*, 13 Dec. 1862, pp. 322–30.

"A Cotton Eden." *All the Year Round*, 4 Jan. 1862, pp. 342–44.

"The Disruption of the Union, As It Would affect England." *The Economist,* 19 Jan. 1861, pp. 57–59.

中村　隆.「『大いなる遺産』の黒人問題」『山形大学紀要』第 14 巻第 3 号，2000 年，pp. 157–70.

森　芳三.『イギリス綿花飢饉と原綿政策』御茶の水書房，1996 年.